

一九八三年のスペインから——表現の自由と風紀紊乱のはざま

久米順子

一九七五年、スペイン内戦以降、独裁体制を敷いていたフランコ將軍が死んだ。フランコが後継者に指名していたブルボン家のファン・カルロス一世は、しかし人々の予想に反して積極的に民主化を推進し、スペインは立憲君主制に移行した。一九八二年の総選挙では社会労働党が大勝して左派政権が誕生した。国教であるカトリックの保守的・伝統的な価値観に支配されたフランコ独裁時代に抑圧されていた人々の声が一気に噴き出したのが、まさにこの八〇年代初頭の民主制への移行期だった。ここでは、カウンターカルチャーとガールズ・パンクの「過激」な歌詞とその社会的反響を紹介したい。

今でこそスペイン映画界の巨匠扱いされるペドロ・アルモドバル（一九五一年生）が「マドリッド・モビーダ」と呼ばれるカウンターカルチャーの「女王」だったことは、日本でどのくらい知られているだろうか。ドラッグ、アルコール、セックス、乱痴気騒ぎでならしたモビーダの真ん中で、アルモドバルは、モビーダの「ミューズ」と称されたスレンダーなファビオ・マクナマラ（一九五七年生）とふたり、派手なメイクを施し、奇抜な衣装にハイヒールをはいて歌を歌っていた（図1）。一九八三年に録音された「わたしママになるの *Voy a ser mamá*」の歌詞を一部翻訳引用してみよう。



図1：『セキシリア』（1982年製作、ペドロ・アルモドバル監督）より、歌うアルモドバル【左】とマクナマラ

出典 https://elpais.com/diario/2004/10/21/espectaculos/1098309601_740215.html

わたしママになるの
中絶なんてしたくない
子宮内避妊具はごめんよ
この子には生きる権利がある
ルシファーって名前をつけて
批判することを教えてあげる
売春で生きてくことを教えてあげる
殺すことを教えてあげる
そうよ、わたしママになるの

フランコ時代に一律禁止されていた人工妊娠中絶に関する法律が整備されたのは一九八五年のことである。中絶を議論できる土壌自体が数十年存在しなかった。ここでは中絶反対というカトリック的価値観と、こどもに悪魔という名をつけ、売春や殺人を教え込もうとする反カトリック的、反社会的価値観をあえて混在させることで、社会規範への風刺をきかせている。

一九八三年に物議をかもした別の曲も見よう。当時十七歳から二十一歳の四人のバスク地方の女の子たちが前年夏に結成した「ラス・ブルペス Las Vulpes」という名のパンク・バンドが、一九八三年四月十六日放送の TVE (国営スペイン放送局)「リズム・ボックス」という土曜日の音楽番組で歌った曲の一部である。

ベッドでひとりオナってる方がまし

将来について話してくるようなやつと寝るよりは

重役連中とやる方がまし

金もらったら忘れるから

売女上等

売女上等

売女上等

エー、オー、アー、アー

アイ、アイ、アイ、アイ、アイ、くそつたれ！



図2: "Me gusta ser una zorra" シングル盤
出典 <https://www.discogs.com/ja/Vulpess-Me-Gusta-Ser-Una-Zorra/release/2152142>

曲自体は彼女たちのオリジナルではなく、イギー・ポップが歌う「I wanna be your dog (お前の犬になりたい)」(ザ・ストウージズ、一九六九年)の自由なアレンジである。こうした英語圏のパンクやロックがスペインに入ってくるようになったのも、さまざまな規制が緩くなったフランコ時代の末期から民主化以後のことだった。

放送後、キリスト教寄りの政策を掲げる中道右派の政治家たちが歌詞の内容に抗議し、右寄り保守派で知られるスペイン主要紙のひとつ『ABC』に歌詞が掲載されて、この一曲の波紋は広がっていった。まず曲名そのものが、ここでは仮に「売

女上等」と意識したが、直訳すると「わたしはメギツネであることが好き Me gusta ser una zorra」である(図2)。メギツネは売女やアバズレの意の侮蔑的俗語で、バンド名もメギツネのラテン語に由来する。歌詞はほかにも「imbécil」「cabrón」「que te den por culo」といった日本語訳に困るような罵り言葉のオンパレードで、現実に社会の一部で多用される口語とはいえ、「良識ある」大人たちが眉を顰めるのも無理はなかった。しかし何より衝撃的だったのは、若い女性が「愛」や「将来」をはなから否定し、自分勝手に、ひたすら貪欲に、利根的な快楽を追求する自らの姿を、白昼堂々、国営放送で肯定的に歌い上げたことだっただろう。

一九八三年当時、フランコ時代にあつた検閲制度は公式に廃止済みで、一九七八年に制定された現行憲法では明確に表現の自由がうたわれていた。同年四月二十七日付の『ABC』紙は、たしかに表現の自由が民主主義の基礎であるとはいえ「もう十分だ、いい加減にしな Ya basta」という強い見出しの社説を掲げて、こんな歌を土曜日のこともや若者がテレビを見る時間帯に放映した国営放送局を強く非難した²。『ABC』紙のライバル紙で左寄りの『エル・パイス』紙は同年四月二十八日付で、あまりに猥褻にすぎると批判する一部の政治家たちの意見と、収録時には爆音で歌詞など聞き取れなかったという(至極もつとも思われる)同放送局ディレクターの声を紹介している³。しかし、番組全体から見ればあの曲は例外的なものにすぎない、そこだけを批判するのは偽善的だという番組編成責任者ラモン・ゴメス・レンドの意見は通らなかった。当時の検察長官ルイス・ブロン・バルバが風紀紊乱罪として「市民が



図3: Las vulpes

出典 <http://somosochenteros.blogspot.jp/2012/03/ocurrio-en-los-80-el-escandalo-de-las.html>

聞きたくない、あるいは、我々が生きている社会の平均レベルにおいて一般的に好まれないと思われるような言葉を一般家庭に響かせた」かどで同番組のディレクター兼司会者のカルロス・テナと作詞者たちであるバンドメンバーの公訴を提起するにおよんで⁴、番組は打ち切られた。

「わたしたちはありのままのわたしたちが好き。わたしたちがオナニーすると言ったからって誰も騒ぐべきじゃないと思う、だってそれって自然なことだし、みんなやってることなんだから。バイオレンス映画を放映したり、こどもたちに特定の宗教を強制したりすることのほうがよっぽど強烈」というコメントと、この曲の入ったたった一枚のシングル・ディスクだけを残して、バンド自体も解散した⁵(図3)。

ちなみに前述のアルモドバルとマクナマラも国営スペイン放送局で体をくねらせながら「わたしママになるの」を歌ったが、そちらはこうしたスキヤンダルには至らなかった。彼らと「ラス・ブルペス」⁶との違いはいったいなんだったのだろうか。

ひとつには、歌詞に使われた語彙の選択が大きく異なっていた。「わたしママになるの」で歌われるのは「殺す」「売春する」という「物騒」な内容ではあるが、あえて口語的表現ではなく新聞で用いられ

るようなかための言葉を使っている。それに対して「売女上等」はどこをとつても俗語罵倒語だらけだった。

一方、歌い手のスタンスもまったく違っていた。「わたしママになるの」を歌う女装した男性たちが、子宮内避妊具など使いうようななく「母親」にもなれないことは誰の目にも明らかである。テレビの前の「良識ある大人たち」は彼らの歌に面喰つたり嫌悪感を覚えたりすることはあつても、社会の周縁に位置するゲイの皮肉をきかせた「お遊び」として受け止めることが可能だったのだろう。無論、民主化と自由の波が押し寄せた当時のスペインで、同性愛者の権利を求めている社会的な活動もすでに始まっていたことは言い添えておかねばならない。偶然ながら、バルセロナのゲイ・ムーヴメントの中心人物として知られたホセ・ペレス・オカーニャ（一九四七年生）がカーニバルで扮装した衣装が燃えて負った重度の火傷で事故死したのも一九八三年だった。

「ラス・ブルペス」のテレビ出演が決まったのは、左派政権が誕生して革新性や多様性を打ち出すリベラルな価値観が幅を利かせ始めた矢先のことだった。放送前には「苦情の投書くらいは来るかもしか思っていないかった」彼女たちの声が、結果的には社会への挑発と受け取られ、風紀紊乱罪という名のもとに社会から消されたのは、俗語罵倒語を当たり前に使う点も含めて、彼女たちがスペインの現実社会に生きていくごく普通の女の子として、自慰や売春（今の日本でいう援助交際というべきか）を含めた自らの性を真つ向から歌ったからではなかった

ろうか。

女性が自らの肉体や性を「ありのままの自分」としてさらけ出したときに、社会から強い反感を買い、拒絶反応をくらう事態は、残念ながら今の日本でもまま起っている。記憶に新しいのは、自分の性器の3Dプリンタ用データをメール配信したかどで二〇一四年に逮捕・起訴されたくでなし子である。若い裸の男性がペニスから大量の精液を噴射する姿をフィギュアにした村上隆の《マイ・ロンサム・カウボーイ》（一九九八年制作）が二〇〇八年にサザビーズのオークションにて約一五〇〇万ドル（約十六億円）で落札されたのとは大違いである。この落差は何なのだろうか。性差だけの問題ではないかもしれないとしても、そこに性差の問題が介在していることは確かに思われる。

正直に告白すると、私はラス・ブルペスの音楽をそれほどいいとは思わない。歌も演奏もうまいとは思わない。しかし彼女たちの声が消されてしかるべきとはまったく思わない。「ありのままの私たち」は風紀を紊乱する存在なのか。彼女たちの無邪気で無防備な叫びは、それゆえにこそ、アルモドバルとマクナマラ以上に強い衝撃を一九八三年のスペインに与えたのである。

その叫びは、「民主化」への移行を終えて久しい二〇一八年のスペインでならばどう響くだろうか。二〇一八年の日本では？ この三十五年の間に何が変わり、何が変わっていないか。彼ら彼女らの歌を聴くにつれ、そんな疑問が頭をよぎる。

(Endnotes)

- 1 『ABC』紙、一九八三年四月二十七日 <http://hemeroteca.abc.es/nav/Navigate.exe/hemeroteca/madrid/abc/1983/04/27/015.html>
- 2 同上。
- 3 『エル・pais』紙、一九八三年四月二十八日 https://elpais.com/diario/1983/04/28/radioiv/420328803_850215.html
- 4 『ABC』紙、一九八三年五月十一日 <http://hemeroteca.abc.es/nav/Navigate.exe/hemeroteca/madrid/abc/1983/05/02/005.html>, <http://curadormag.com/mi-tambien-gusta-ser-una-zorra/>
- 5 『エル・pais』紙、一九八三年五月一日 https://elpais.com/diario/1983/05/01/radioiv/420588002_850215.html